



**エルフの村に
召喚された貴方が
姫巫女にいっぱい甘やかされる話**

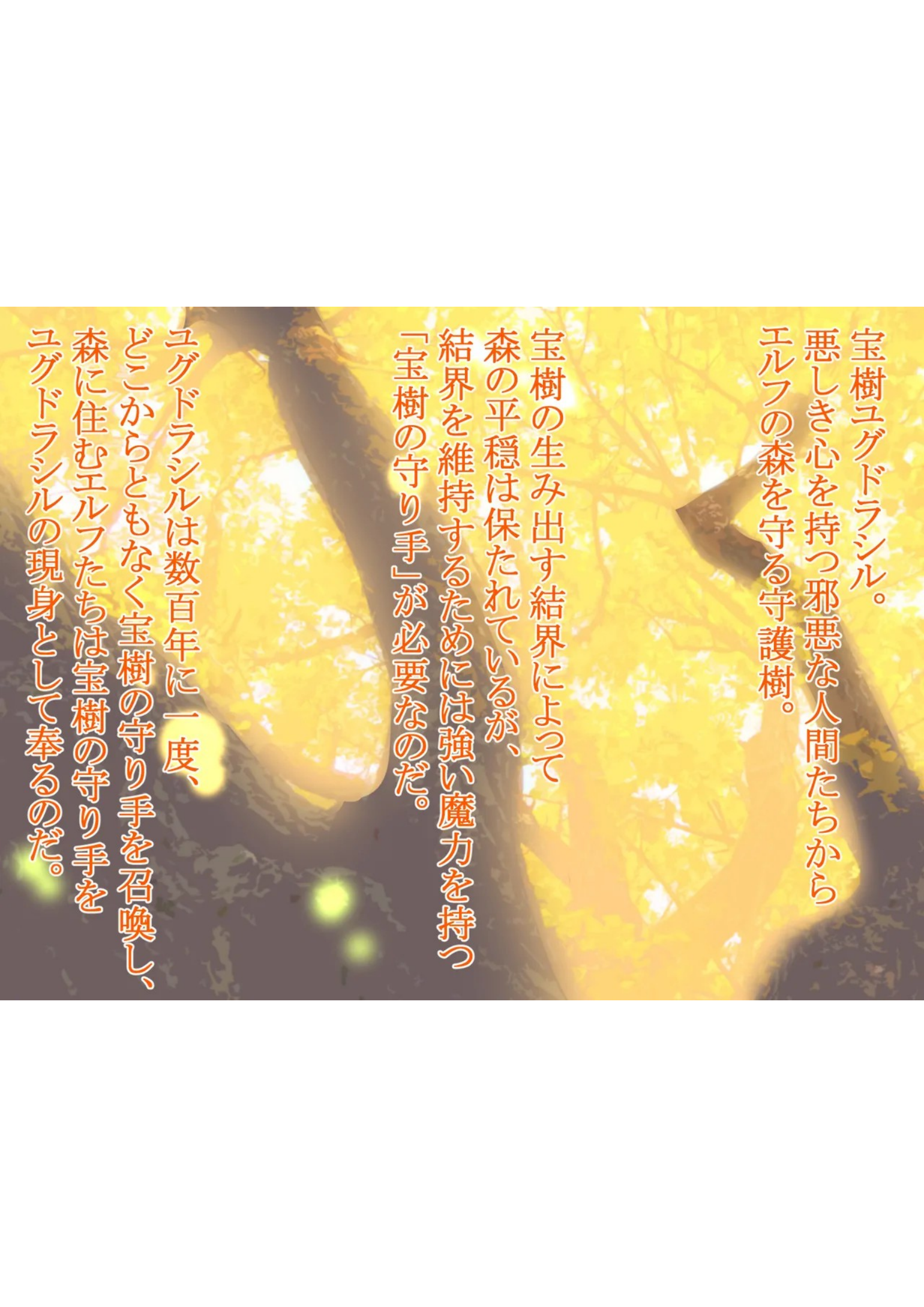
「お仕事させていたたきますね。はい、お好きですよね。」

「も困いのが...は...え...て...す...か殿方の...おちゃん様なので...」

「おしなべて大きくなつてしまった...愛い♡とても愛おしいわ♡」

「お姫様様のお聖めし...」

「お姫様様のお聖めし...」



宝樹ユグドラシル。
悪しき心を持つ邪悪な人間たちから
エルフの森を守る守護樹。

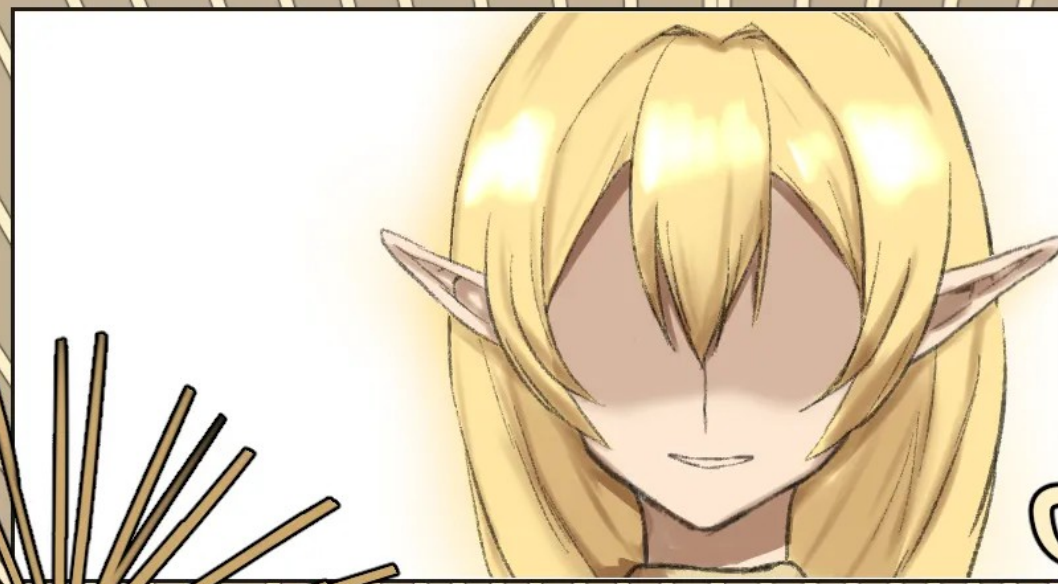
宝樹の生み出す結界によつて
森の平穏は保たれているが、
結界を維持するためには強い魔力を持つ
「宝樹の守り手」が必要なのだ。

ユグドラシルは数百年に一度、
どこからともなく宝樹の守り手を召喚し、
森に住むエルフたちは宝樹の守り手を
ユグドラシルの現身として奉るのだ。

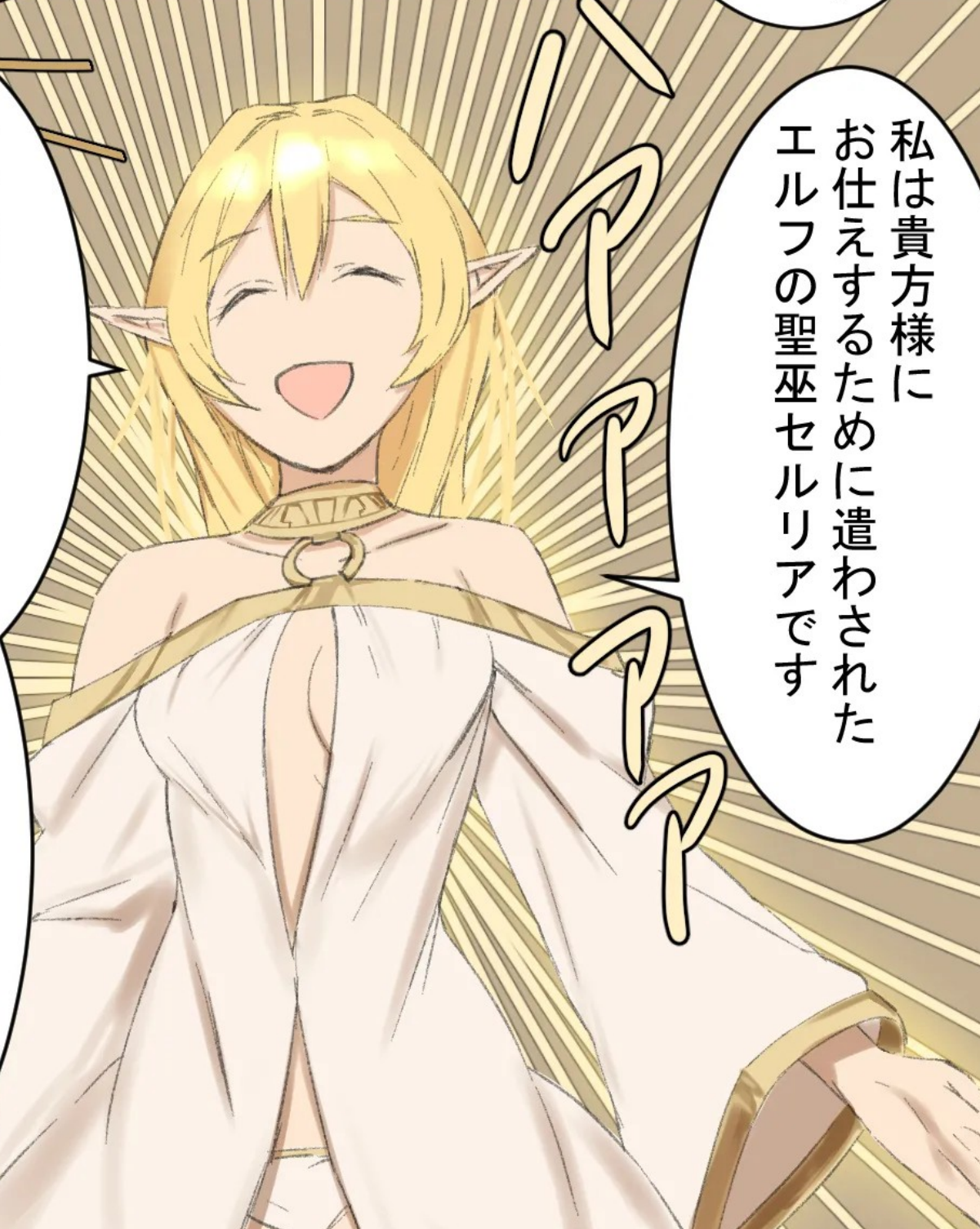
社会人生活が始まって数年が経過。

慌ただしい日々を必死に過ごしているうちに、
少しずつストレスが蓄積し、
精神は擦り切れてしまった貴方。

ある日目覚めるとそこは見知らぬ場所で、
目の前には金髪の美少女が傳っていたのだった――。



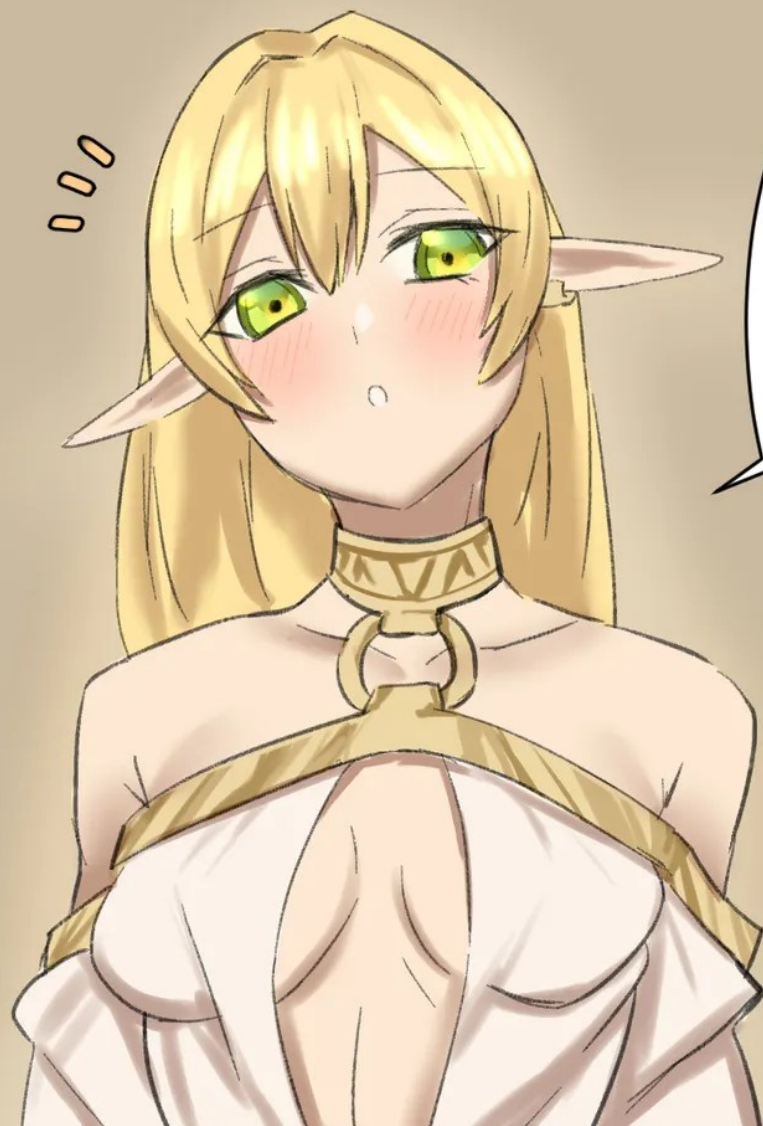
お待ちしておりました、
宝樹の守り手様



私は貴方様に
お仕えするために遣わされた
エルフの聖巫セルリアです

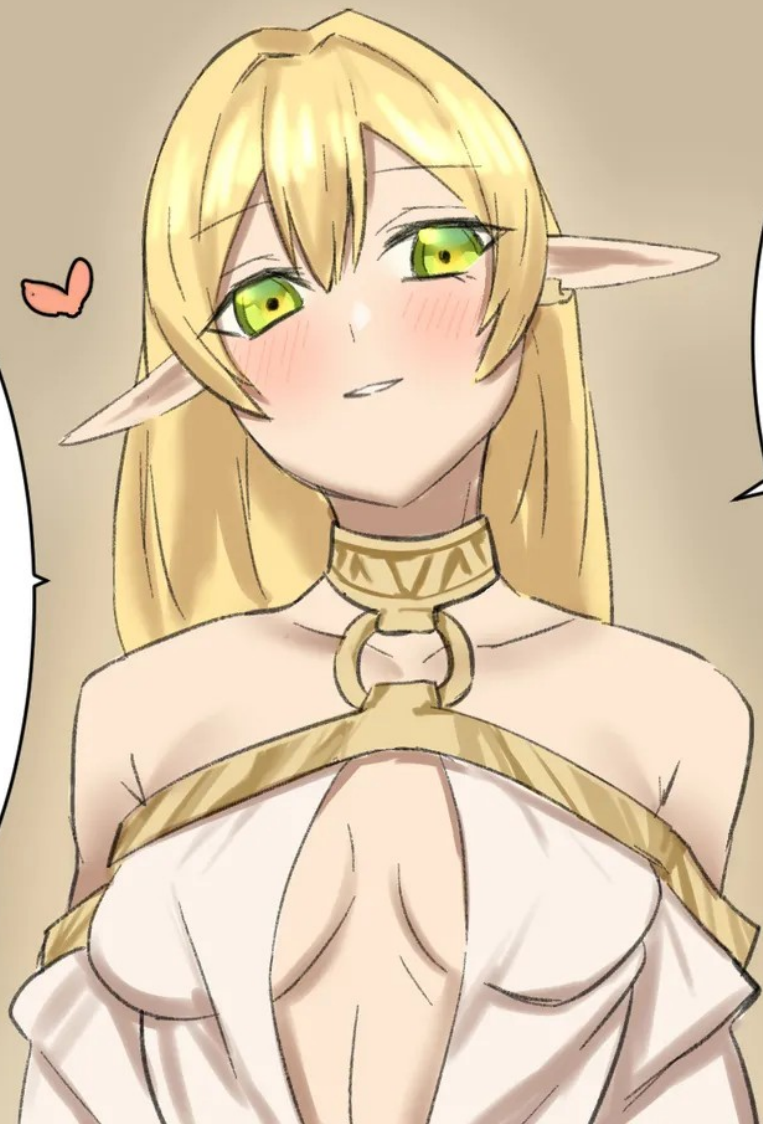
貴女様のために
誠心誠意ご奉仕させて
いただきますね。

なんでも、貴方様の
なさりたいことを
お申し付けください。



…え？
つらい思いをしてきたから
いっぱい甘えたい？

ふふ…承知いたしました



それでは私めが
精一杯甘やかして差し上げますね♡

セルリア

宝樹ユグドラシルを奉るエルフたちの中で儀式を執り行う聖巫。
ユグドラシルの化身である貴方に着き従い、文字通りどんなことでもしてくれる。
現代社会に疲れ果てた貴方は彼女に癒しを求める。
そんな貴方にセルリアは聖巫としての役割以上に、貴方を愛おしく感じるようになるのだった。



「それではおちんぽ様にぐぐ奉仕いたしますね。」



「まずはこのしよんぽりおちんぽ様を

元気にするところからですね。」

「やさしく…なでなで…なでなで…なでなで…」

「なでなで…なでなで…なでなで…あつー！」

「おおきくなつてきましたよ♡」



「なでなで…なでなで…ふふ、御立派です♡
なでなで、びくびく震えていらっしやいますわ。」

「もどかしいのですか？

ふふ、切なさうなお顔をされていますね。
気持ち良いのですね♡」



「まあ、もうおチンポ様がビンビンに勃つてしまわれましたわ♡
優しく撫でられるのが興奮するのですね。」

「さきっぽのほうと、くびれた部分を…
なでなで、なでなで…。」



「あつ…あら？もう達してしまわれるのですか？」



「わかりました、
いっぱい気持ちよくなってくださいませね♡」

「はぁーい、
ぴゅーっ、ぴゅーっ、
ぴゅーっ、ぴゅーっ、
ぴゅーっ、ぴゅーっ、
ぴゅーっ……。」



「うふふ、たくさん出ましたね♡
気持ちよくなっていただけでしたか？」



「うふふ、それでは私の口でお慰めしますね♡」



「まずはぐっ挨拶のキスを……ちゅ♡」



「ふふ、御立派ですわよ♡
ご奉仕しているのは私ですが、
すごくいやらしい気分になってしまいます♡」



「まずは私の舌でぺろぺろさせていただきますわね♪」



「ん…れる…びちや、れる…れる…」





「あつ、びくんと跳ねました！ お気持ち良いのですね♡
ああ、恥ずかしがらないでください…♡」

「どうぞいっぱい気持ちよくなってくださいませ♡」

「あー……ん。」



「ん……ごめい……ごめい……ごめい……ごめい……ちゅぽい……」

「ああ……」

「なんていやらしいカタチをしておられるのでしょうか……♡」





「あら？ おちんぽ様がビクビクしてきましたわ。
…え？ 気持ち良すぎてもう出ちやいそう？」

「ふふ、大丈夫ですよ♡
私がお口で受け止めますから、何も心配せずに
気持ちよくくびゅつびゅしてくださいね♡」



「いっぱい出ましたね♡え…?」

はい、お精子はもちろんぜんぜん飲んでしまいました♡」

「気持ちよくお射精できましたか？
ふふっ、それはよかったです。」

「気持ちよくお射精できましたか？
ふふっ、それはよかったです。」

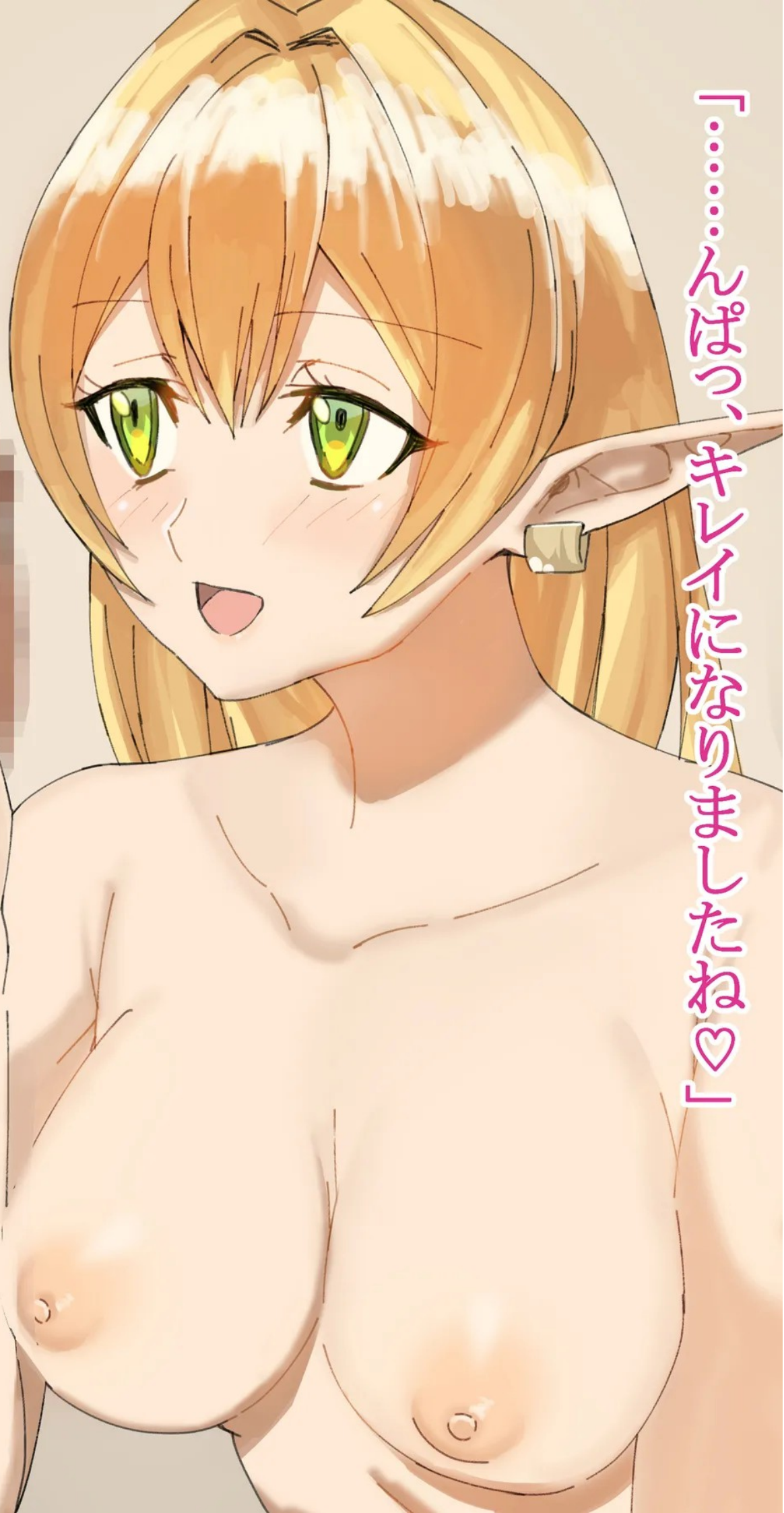
!!!

「あら？まだおちんぽ様にお精子が残っていますね。」



「……んぱっ、キレイになりましたね♡」

「またおちんぽ様が苦しくなっただときはいつでもお呼びくださいね♡」





「それでは私が膝枕をさせていただけきますわ。さ、膝の上に寝転がってください。」

「うふふ、いい子ですね♡」

「あら？もうおちんぽ様を勃起させてしまったのですか？」



「え？期待しすぎて大きくなってしまった？
ふふ、可愛い♡とても愛おしいですわ♡」


「いっぱい甘やかして差し上げますね♡」

「あ…ん…っ♡おっぱいに夢中になっ
ていますね♡
いつぱいちゅぱちゅぱして
くださいね♡」

ぢゅぱっ

ぢゅっ





「あつ…♡おちんぽ様がピクピク震えています♡
興奮しているのですね。」

「うふふ…♡おっぱいおいしいですか？
あつ…♡やだ、私の方が気持ちよくなっちゃってしまいます♡」

「おっぱいがお好きなのですか？」

おちんぽ様、ガツチガチですごーく固くなっていますよ♡」

「あつ…、おちんぽ様から透明なお汁が出ていますわ♡」





「いい子ですね♡」

「辛いとはザーンと泣いて、」

「いいいいいいいい、甘えていいんですよ♡」

「あ……っ♡タマタマさんからお精子があがってきましたよ♡
ぴゅっぴゅしそうなのですね。」



「あ……っ♡タマタマさんからお精子があがつてきましたよ♡
ぴゅっぴゅしそうなのですね。」

「いいですよ♡

私のおっぱいちゅぱちゅぱしながら、
いーっぱいぴゅっぴゅしてくださいね♡」

ググッ
ッッッ♡



「いっぱいぴゅっぴゅ出来ましたね♡ えらいですよ♡
気持ちよかったですか？良かったです♡」

「それではお精子を流しにいきましょうか♡」



「それではお体をキレイにさせていただきますね。」


「ええ、もちろん私の手で直接洗わせていただきます。
お肌は敏感なところですから、
やさしくナデナデいたしますね♡」



「では失礼して…。

あつ…♡ 逞しいお体ですね♡

すごく筋肉質で…女の体とは全然違います…♡」



「まあ…♡ あんなにお出しになったのに、おちんぽ様がビンビンになっていきますよ♡」

「タマタマさんの方から、優しくもみほぐしていきますね♡」

「もみもみ、もみもみ…。」

もみもみ、もみもみ…♡」

「すごく切ないお顔をされていますね…。」

「タマタマさんを撫でられるのが好きなのです…。」

もみ♡
もみ♡
もみ♡

〃



「よいしょ…つと。」

胸でござん奉仕させていただきますね。
おっぱい、好きですよね？」



「ふふふ、それら...ニャニャニャニャ...♡
ニャニャニャニャ...♡」

「貴方様のためだけに、はしたなく育った私のおっぱいは
気持ちいいですか？うふふ、良かった♡」

もにゅ♡
もにゅ♡
にゅ♡
しゅ♡



「ジュジュジュジュジュジュ…。」

先ほどから我慢されていましたが、
先っぽからお汁がどんどん溢れ出してきますわ…♡」

とろ〜…

たろろ♡

たろろ♡



「なんて可愛らしいおちんぽ様なのでしよう…。
私のおっぱいから亀さんがぴよっりとお顔を出されて…♡」

「気持ちよくなーれ♡
気持ちよくなーれ♡」



「あつ…♡すげい♡
すっごく震えていますわ♡」



「お射精してしまいそうなのですか？
いいですよ、我慢なさらないで♡」

「私の体は、貴方様のためだけのものなので、
貴方様のなさりように、お好きに使ってください♡」

くっ
子

くっ
子





「出るんですね…♡ いっぱい出してくださーいね♡」

♡
♡
♡

♡
♡
♡



「はい、

ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、

」♡

ジュ

ッ♡

ジュ

ッ♡

「お風呂です…♡

さっきもお射精されたばかりですのに…。」

「いっぱいお射精できて、えらいですよ♡」





え…『我慢できない』…ですか？
それは一体どういう…



あつ……。つつまり…
私を抱いて下さる…
ということですか…？



は…はい…。
貴方様の為に守ってきた
私の純潔、貫つて下さいます…♡



「は…はい…。貴方様の為に守ってきた私の純潔、
貫つて下さいませ…。」

「さあ…私の蜜壺をお使い下さい…。」

「あっ……♡当たってます……♡」

あー♡
あー♡



「とても固いのが…は…入って…ます…♡
これが殿方の…おちんぽ様なのですね…♡」

ズブ…

ム
ム
ム

ム
ム



「すごい…中に固いのが入ってるの…
…んっ…わかり…ます…っ」

「はあ…はあ…あ、熱い…っ」

「さ、私を使つて気持ちよくなつてください…」

「私のことは貴方様にご奉仕するためだけの
雌穴だと思ひになつて…」





「あっ、あっ、あっ、あっ……♡」
「うふふ、いっぱいズポズポしてくださいね……♡」

パッパッ♡

ズッ

ズッ

パッパッ♡

「私のおまんこ、いかがですか？」
「エルフの聖巫は宝樹の守り手にご奉仕するためだけに
純潔を守り続けているのです」

ハア……♡

「つまり私は、
貴方様専用おまんこなんですよ♡」
ハア……♡



「あつ、あつ♡」

「おちんぽ様激しくなりましたっ♡」

の
ハ
ミ



ハ
ミ
の
ハ
ミ

「おちんぽ様イライラしてしちゃったんですか？」
「いいですよ♡お好きに私を使って…♡」

「出そうなんですか？お射精しちゃうんですか？」
「いいですよ♡いいーっぱい私の膣内に出してくださいね♡」

の
ハ
ッ
ッ

ハ
ッ
ッ
ハ
ッ
ッ



「ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ…♡
「んっ…♡あぁ♡膣内に出ています…♡」
「セッ」

「セッ」

「セッ」

「セッ」



「は…ああ…♡いっぱい出ましたね♡
おちんぽ様スツキリできましたか?」

ド
ク
ッ

ド
ク
ッ

ド
ク
ッ

「お疲れ様でした。いっぱいお射精できましたね♡」

ナッ
ナッ
ナッ



「さ、いっぱい頑張った良い子は
おっぱいちゅぱちゅぱしまししょうね♡」

ちら
ちゅ

ちゅ
ぱ
ちゅ
ぱ



「あっ……♡

唇で乳首を挟んで、舌がすごく動いています……♡
もう、えっちな赤ちゃんでもちゅね♡」

ざら
やつ

しゃ
ぽっ



「これから毎日、
いつでも私のおっぱいを吸っても良いのですからね」

ざら
やつ

「このセルリアは貴方様のためだけの
ご奉仕エルフなのですから……♡」
せ
しゃ
ぱ
っ

